

○ 修 証 義

第 一 章 総 序

(第一節) 生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁
 なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死
 即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもな
 く、涅槃として欣うべきもなし、是時初めて
 生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽す
 べし。
(第二節) 人身得ること難し、仏法値うこと希れ
 なり、今我等宿善の助くるに依りて、已に受
 け難き人身を受けたるのみに非ず、遇い難き
 仏法に値い奉れり、生死の中の善生、最勝の
 生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を
 無常の風に任すること勿れ。
(第三節) 無常憑み難し、
 知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已
 に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め
 難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとす
 るに蹤跡なし、熟観ずる所に往事の再び逢う
 べからざる多し、無常忽ちに到るときは国王
大臣親暱従僕妻子珍宝たすくる無し、唯独り